論文和文要旨	
論文題目	アラビア語文学史から見る 20 世紀のエジプトにおけるナショナリズム
氏名	平　寛多朗

本論文は、20 世紀におけるエジプトのナショナリズムの特徴を明らかにすることを目的としている。これまでエジプトのナショナリズムに関する研究では、ナイル河谷に広がる領土への帰属意識からエジプトの独自性を強調し、その歴史、文化はアラビア半島を起源とするアラブ人のものとは異なると主張するナショナリズムが20世紀前半のエジプトでは主流であったと述べられてきた。しかし言語という観点からエジプトのナショナリズムを見ると、そのようなエジプトのナショナリズムの見方では説明できない点がある。それは、エジプト固有の言語ではなく、アラブ人という民族の言語である正則アラビア語がエジプト国民の国語として選択されたという点である。さらに公教育では、アラビア半島を起源とするその言語の歴史が、国民の言語文化の歴史として変わることなく教えられてきた。その事実は従来の研究で述べられてきたナショナリズムのあり方とは明らかに矛盾するものである。そこで本論文では、エジプトのナショナリズムに関する既存の研究に修正を加えるため、アラビア語文学史を取り上げ、言語の歴史として具現化されたナショナリズムの分析を行った。

本論文の一章では、議論の前提となるパンイスラーム主義、アラブナショナリズム、領土的ナショナリズムの思想的特徴を言語的観点から概観した。同時に、それら三つのナショナリズムが異なる共同体のあり方を求めているにもかかわらず、同一の文学史をそれぞれの共同体の言語の歴史とすることが可能であることを論じた。二章、三章では公立学校の国語教育で使用されたアラビア語文学史の教科書の分析を行った。二章ではエジプトの独自性が強く主張された時代である 1929 年度の教科書を取り上げ、三章ではアラブの統一がエジプトで国是となった時代である 1960 年度の教科書を取り上げた。そして全く異なるそれら二つの時代を比較することで、教科書は時代に関係なく、アラブの中心はエジプトであるとするアラブナショナリズムを示していることを明らかにした。四章では教育省の管轄する教科書とは別の場で示されたアラビア語文学史を複数取り上げ、教科書が示すアラブナショナリズムが政権の政治的方向性を反映しただけのものではなく、より広範な範囲で共有されていたことを示した。最後に五章では、エジプトとは異なる歴史的背景を持つヨルダンで刊行されたヨルダンのアラビア語文学史を取り上げた。これはエジプトとヨルダンのアラビア語文学史を比較することで、アラビア語文学史が地域特有の背景を反映したアラブナショナリズムを示すということを確かめるためである。五章の分析を通して、エジプトのアラビア語文学史が示すものが、エジプト特有のアラブナショナリズムであることを確認した

本論文で明らかにしたことは次の二点である。一つ目は、エジプトでは領土的ナショナリズムとアラブナショナリズムが截然とは区別されず、それら二つのナショナリズムは実質的に等号で結ばれているという点である。文学史の中で、アラブ人の歴史はエジプトを中心にして展開したと捉えられており、エジプトの歴史を語ることはアラブ人の歴史を語ることと同じ意味になっていた。そのため民族的な感情からアラブ人の歴史を語れば語るほど、その歴史の中におけるエジプトの指導的役割が強調されるような構図が生み出されていた。

二つ目は、エジプトのアラビア語文学史がイスラム教徒の立場から編まれているという点である。先行研究では、エジプトで現れた領土的ナショナリズムとアラブナショナリズムは、宗教的帰属意識よりも領土、あるいは民族への帰属意識を優先する世俗主義的なナショナリズムとされていたが、文学史からイスラーム的価値観が排除されることはなかった。むしろエジプトの学校で教えられるアラビア語文学史では、イスラーム的価値観を前面に押し出す言説の多さを確認できた。その一方でキリスト教徒が文学史の中で言及されることがないことも、同時に確認した。エジプトには、人口の 10%を占める土着のキリスト教徒がいるが、それらのキリスト教徒は文学史から完全に排除されていたのである。

以上の点から、本論文は次のように結論付けている。20 世紀のエジプトでは、暗黙の裡にキリスト教徒を排除し、アラブ・イスラームの歴史の中で指導的な役割を果たしてきたエジプトを強調するアラブナショナリズムによって、エジプト国民という思想が一貫して構築されてきた。1920 年代以降、キリスト教徒とムスリムによって構成される世俗的な国民という概念が主張されたが、学校教育という実際の国民形成の場ではそのような世俗主義的な思想に立脚した教育は行われていなかった。教育以外のアラビア語文学史においても、そこに描き出されるのは一貫してアラブ・イスラームの歴史と結びつけられたナショナリズムであった。

本論文の結論は、従来の研究とは異なるエジプトのナショナリズムの姿を明らかにしただけでなく、次の二点においても意義があるものである。一つ目はナーセルが大統領となる以前のエジプトにおいても、アラブ人への帰属を前提として国民形成が行われていたことを確認できた点である。既存の研究では、20 世紀前半のエジプトには、あたかもアラブ人としての意識が存在しなかったかのように語られてきた。そして、エジプトの人々はパレスチナ問題を通じて徐々にアラブ人という民族に属することを自覚するようになったが、民族的な帰属意識から生じるアラブナショナリズムがエジプトで主流となるのには、ナーセルの出現を待たねばならなかったと述べられてきた。しかし本論文で示したように、そのような主張は正確ではなく、エジプトでは独立以来、一貫してアラブ人という民族への帰属意識を前提として国民形成が行われてきた。また、1929 年度、1960 年度の教科書がパレスチナに関する文学を取り上げることはなく、アラブ人への帰属意識がパレスチナ問題と関係なく存在するものであったことも確認できた。エジプトにおいてアラブ人という意識が強く主張されなかった時代があるとすれば、それは従来の研究で言われるように、エジプト人という意識の強さ、領土的ナショナリズムの影響力の大きさが理由ではなく、近代以降のアラブの歴史の主人公はエジプトであり、エジプトの歴史すなわちアラブ人の歴史という視点がエジプトに存在したためである。

二つ目は、イスラーム的価値観を前面に押し出す教育が変わらず行われていたことを確認できた点である。従来の研究では、1970 年代以降に起きた「イスラーム復興」あるいは「イスラーム主義」と呼ばれる現象を、20 世紀前半にエジプトの政治分野で支配的であった世俗主義への失望、反発として説明してきた。そういった説明は、西洋化及び世俗主義の拡大が公的空間からのイスラームの排除およびイスラーム的実践の社会的消失と対置されるような非常に単純化された構図の中でなされてきた。しかし本論文で示したように、教育という公的空間からイスラーム的価値観が排除されたという事実は一度としてないのである。イスラームはエジプト社会に深く根差しており、その影響力を失ったことなどない。

領土的ナショナリズムからよりアラブ・イスラーム的なナショナリズムへの変化を教育の拡大によって説明した研究もあるが、注意しなければならないのは、アラブ・イスラーム的要素を排除した西洋的で世俗的な教育を受けたにもかかわらず、アラブ・イスラーム的なナショナリズムを主張する知識人が増えたという捉え方は事実とは異なるということである。少なくとも本論で取り上げた教科書を見る限り、そのような純然たる世俗的な教育は行われておらず、アラブ・イスラーム的な視点から描かれた教科書が使われていた。教育現場で示されるエジプト国民という概念は、独立以降変わることなく、あらゆる宗教を包括するようなものではなく、ムスリム・アラブ人であることを前提としていた。1950 年代におけるアラブナショナリズムの興隆も、その後におけるイスラーム主義の台頭もこの文脈の中で考えられるべきである。つまり、パレスチナ問題を契機としてアラブ人としての自覚が生まれたわけでもなく、イスラームが突如として「復興」したわけでもない。教育を通した国民形成の一つの結果として、それらの現象は生じたのである。